

されど笑いつつ真理を語ることを禁ずるものは何か?

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学 公開日: 2013-05-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 桑森, 真介 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/15818



新入生へ贈る私のメッセージ



されど笑いつつ真理を語ることを 禁ずるものは何か？

桑 森 真 介

(くわもり・まさすけ)

商学部

教授。

担当科目「体育スポーツ実習」、

「スポーツと健康」、「教養演習」、

「基礎演習」。

一九五五年福井県大野市生まれ。

明治大学政治経済学部卒。筑波大

学大学院修士課程体育科学研究科

修了。東京医科大学にて博士号(医

学)取得。



大学院生時代に、明治大学駿河台校舎の近くのある古本屋で時間を潰していたところ、ある一冊の本が目にとまった。A. V. Hill 著（若林・真島訳）「筋収縮力学の実験——A. V. Hill 教授の歩んだ道——」であった。当時、私は、筑波大学大学院でヒト骨格筋が発揮するパワーに関する研究に取り組み始めたばかりであった。研究テーマに関してすでに発表されている論文を探して読むと、“A. V. Hill”の名前はしばしば登場してきた。A. V. Hill はイギリスの生理学者で、一九二二年に筋肉中の熱発生の研究でノーベル医学・生理学賞を受賞した著名な科学者である。

その時、私は、この本が自分の研究に方向を与えてくれるかもしれないと思い、躊躇することなく購入した。自宅に帰り、早速この本を開いた。最初に、目次を見た。一〇一〇章の中の第二章「されど笑いつつ真理を語ることを禁ずるものは何か？」に目にとまった。専門書の本文中にある章のタイトルとしては奇妙なタイトルだと思った。第二章を開くと、その意味が記されていた。この表現は反語であって、何が真実であるかを語るのに、何も難しい顔をしている必要はない、笑いながら話してどうしていけないのか、という意味だと解説されていた。私は、この本の内容が十分に理解できず、その頃の自分の研究にもあ

まり役立てることはできなかつたが、第二章のタイトル「されど笑いつつ真理を語ることを禁ずるものは何か？」に強く心を惹かれた。

私は、小学生から大学生までの間はあまり勉強が好きでなかつた。大学院に進学してからは、自由にテーマを選んで勉強したり研究したりすることができるようになり、自分自身の中から湧き出る好奇心から勉強できるようになった。博士号取得を目標として研究していた頃には、苦勞して得た実験結果について共同研究者たちと楽しく議論したり、同じ分野の研究者たちと研究について楽しく話をしたりすることができるようになった。その時の楽しさは、子供の頃、友達と自宅近くの神社に遊びに行き、神社の裏の沼地に生息していた亀を捕まえたり、神社の床下の蟻地獄を観察したりした時の心ときめきと大きな違いはなかつたように思う。

学生諸君は、「勉強・研究を楽しむ」ことができるだろうか？私は、商学部で教養演習（少人数のゼミ）を担当している。私のゼミでは、四月に授業が始まったばかりの時にコンパを開く。その最初のあいさつの中で、私はよく、前述のA. V. HIIIの言葉を紹介し、このゼミでは楽しみながら勉強したり研究したりしようと学生に話しかける。学生たちは、ま

だ入学して間がないということもあってか、神妙な顔で私の話を聞く。

でも、学生に「勉強・研究を楽しむ」ことを求めるのは無理なのかもしれない。五月の連休が過ぎた頃になると、ゼミの学生たちは徐々に仲良くなってきて、授業で集まった時に楽しそうに会話を交わすようになる。ただ、会話の内容は、ゼミの研究テーマに関することなら良いのだが（それ以外のことでも知的な会話ならまだ良い）、前夜の飲み会でのこと、アルバイト先でのこと、サークルのことなど、知的好奇心に基づくとは言い難いものがほとんどである。

まれではあるが、ゼミの学生が生き活きと研究活動に打ち込むようになることがある。学生たちが、自らの知的好奇心から、調べてきたことや測定結果について議論したり、研究をすすめようとしたりする姿を見ることは、私たち教師にとっては大きな喜びである。

しかし、多くの場合、その好奇心に基づく活動は持続せず、私の学生に対する期待は裏切られる。毎年、教養ゼミを担当していると、二年間に一人の確率で、最後まで積極的に研究活動を継続する学生に出会う。私の教養ゼミでは、ここ数年二〇名前後の学生が履修するので、四〇分の一の確率ともいえる。共同研究グループの中に、最後まで研究に関心を



ゼミで指導中の筆者

もち積極的に取り組む学生が一人いれば、その学生が他の学生をリードし、論文が最終的に完成する。そして、その論文は商学部学生用の論文集「教養ゼミナール」に掲載される。つまり、結果的に、私のゼミ生の論文は、二年に一編「教養ゼミナール」に掲載されることになる。私のゼミでは、論文を作成し「教養ゼミナール」に投稿することを目標として活動している。しかし実際には、前述のように多くの学生が途中で挫折し、二年間で、一つの研究グループしか目標を達成できないのである。

私は時々、大学に入学し二年目に入ったばかりの遊び盛り(?)の学生に、研究を楽し

むことを求めるのは無理なのかもしれないと思うことがある。しかし、あんなに勉強嫌いだった私でも、研究を楽しむことができるようになったのだから、誰でも研究を楽しむことができるはずであると思ひ直し、現在もゼミの学生に何とか研究の面白さが分かるように指導している。

私は、学生に高望みしているのかもしれない。しかし、子供の頃にはだれもが持っている好奇心を再び蘇らせ、それを勉学の場に活かすことは不可能ではないと思う。私は、子供のようにキラキラと輝いた眼差しで楽しそうに勉強・研究に励む学生が一人でも多くなるよう望んでいる。そのために私ができることがあるれば、協力を惜しまないつもりである。学生たちと一緒に楽しみながら研究することは難しいことなのかもしれないが、自分の間は、私が好きなA. V. Hillの言葉「されど笑いつつ真理を語ることを禁ずるものは何か？」を、我が明治大学の学生に伝えていこうと思う。

新入生諸君。私たち教員と勉強・研究を楽しみませんか！